

用語について (VI)

山口青邨

最後に造語といふことにちよつと觸れておきたい。何かを表現する時に、自分で言葉を作ることがある、又、外國語を日本語に譯す時に出来る言葉である、自分で作るのだが、いかげんに、又、出鱈目に作ったのではこれは人をまどはすことになるのでよくない、十分に責任がもたれなくてはいけない。同時にその言葉はうつくしいといふことも必要である。

雨罨の流るゝ椿うちかこみ 青邨

天使魚もいさかひすなりさびしくて 秋櫻子

雨罨は水面に雨脚が落ちて、ぼつぼつ笑罨のやうにくぼむもの――といふ意味で私か作った、先例はないやうである、かういふことによつて簡単な字で、複雑なことが盛られ、流れる椿の花をほちほちと圍む雨脚のあなの美しさも出るのだと思つてゐる。

天使魚はエンゼルフィッシュの譯語である、てんしぎよではなくて、てんしうをと讀むのであらう、熱帯産の鬩魚を作者が眺めて作ったのである、天使といふうつくしい言葉をどうしても使ひたかつた、それが、あとにつづく、いさかひすなりとか、さびしくてといふやさしい、心持にまで影響をもつからである。

山口青邨著『俳句入門』より抜粋